

平成29年度受賞パンフレット



“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

# 第15回 オーライ!ニッポン大賞



「オーライ!ニッポン」とは

都市と農山漁村の間の“人・もの・情報”の往来（おうらい）を盛んにすることで、日本全国が元気（All right）になることをめざす国民運動「都市と農山漁村の共生・対流」のキャンペーンネームです。

## 第15回 オーライ! ニッポン大賞 講評

都市と農山漁村の共生・対流（以下「共生・対流」という。）に関する優れた取り組みを表彰するオーライ！ニッポン大賞は、第15回を迎えることができました。これもひとえに現場で活動を実践されている皆様のご尽力と、関係7省をはじめ関連団体及び地方自治体等関係者の皆様の温かいご理解とご支援の賜物であり、この場をお借りして心より敬意と感謝を申し上げます。

政府におかれましては、魅力あふれる地方を創出し、地方への人の流れを創り出す「まち・ひと・しごとの創生」に取り組んでおられます。「共生・対流」とは、都市と農山漁村を相互に行き交うライフスタイルを広め、都市と農山漁村の双方が元気を取り戻すことをめざす国民運動であり、その役割はますます重要になるものと存じます。

さて、今年度は全国からオーライ！ニッポン大賞92件、ライフスタイル賞17件、合計109件のご応募を頂きました。募集の周知にご協力いただいた関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

応募の内容を拝見したところ都市と農山漁村の共生・対流の取り組みは、それぞれの農山漁村でしっかりと根をはり、その取り組みから新たな交流が広がっていく様子がうかがわれました。

特に、都市から全国の棚田へボランティアをしたい人を誘導する活動、有機農業へのホームステイを仲介するなど都市と農山漁村を繋ぐ活動、小さな限界集落を支援する活動、若者の自由な考えによる活動と農山漁村の交流を通じて、地域の人々が元気になっている様子、都市生活者が自然豊かな農山漁村で滞在型体験活動を通して、高い満足感、幸福感を得ていると力強く感じました。

都市部からの移住（U J Iターン）や都市と農山漁村を行き来する二地域居住等を通じて個性的で魅力的なライフスタイルを実践しながら共生・対流に貢献している個人を表彰するライフスタイル賞では、ブルーベリー、オリーブ、トマトなどの野菜を生産し、その加工やカフェ、レストランを自営して農業の6次産業化を図る活動や地域の人々に支えられながら農家民宿（古民家を改造したゲストハウス）を運営する姿が印象的でした。

取り組みのテーマや手法は個々に異なりますが、都市生活者の都市と農山漁村のオーライ（往来）として、田舎暮らしのモデルとして、参考となるものと思います。

審査委員会における選考の結果、オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件、オーライ！ニッポン大賞3件、審査委員会長賞2件、ライフスタイル賞5件の計11件を選定いたしました。

グランプリに輝いた「株式会社 信州せいしゅん村」(長野県上田市)は、農村のありのままの暮らしを体験する(農作業・自然散策・家庭生活を一緒に行う)『ほっとステイ事業』を民間事業として2002年から継続し、2006年からは海外からも農村体験ホームステイを世界20か国から大人・子供・家族を受け入れています。『前例のないことを独創的に』をモットーにして、「農家レストラン里の食」や「Gファーム」を営業しつつ、信州大学、県立病院と農村の癒し効果についての実証の取り組み、さらに立科町・茅野市を始め県下7地区で展開している長野県ほっとステイ協会を設立し広域地域振興として取り組み、全域の年間受入者数は約2万人にも上るなど、農村地域を守るために多様な事業を展開し確実な成果を上げ、他地区のモデルに十分なり得ると高く評価されました。

その他の受賞者の皆様に対するコメントは、受賞内容をご紹介します各ページに記載させていただきましたのでご覧ください。

惜しくも受賞を逃された皆様の中にも魅力的な取組が数多くございました。今後、さらに実績を積み重ねて次回以降に再度ご応募いただきますよう、心からお待ちいたしております。

最後に受賞者の皆様をはじめ、すべての応募者の皆様にこれまでの共生・対流に対するご尽力に感謝申し上げますとともに益々のご活躍とご発展を祈念いたしまして講評に代えさせていただきます。

平成30年3月26日  
オーライ！ニッポン大賞 審査委員会  
会長 安田 喜憲



# 第15回オーライ!ニッポン大賞 受賞者一覧

## オーライ!ニッポン大賞グランプリ

- 1 長野県 上田市  
株式会社 信州せいしゅん村

## オーライ!ニッポン大賞

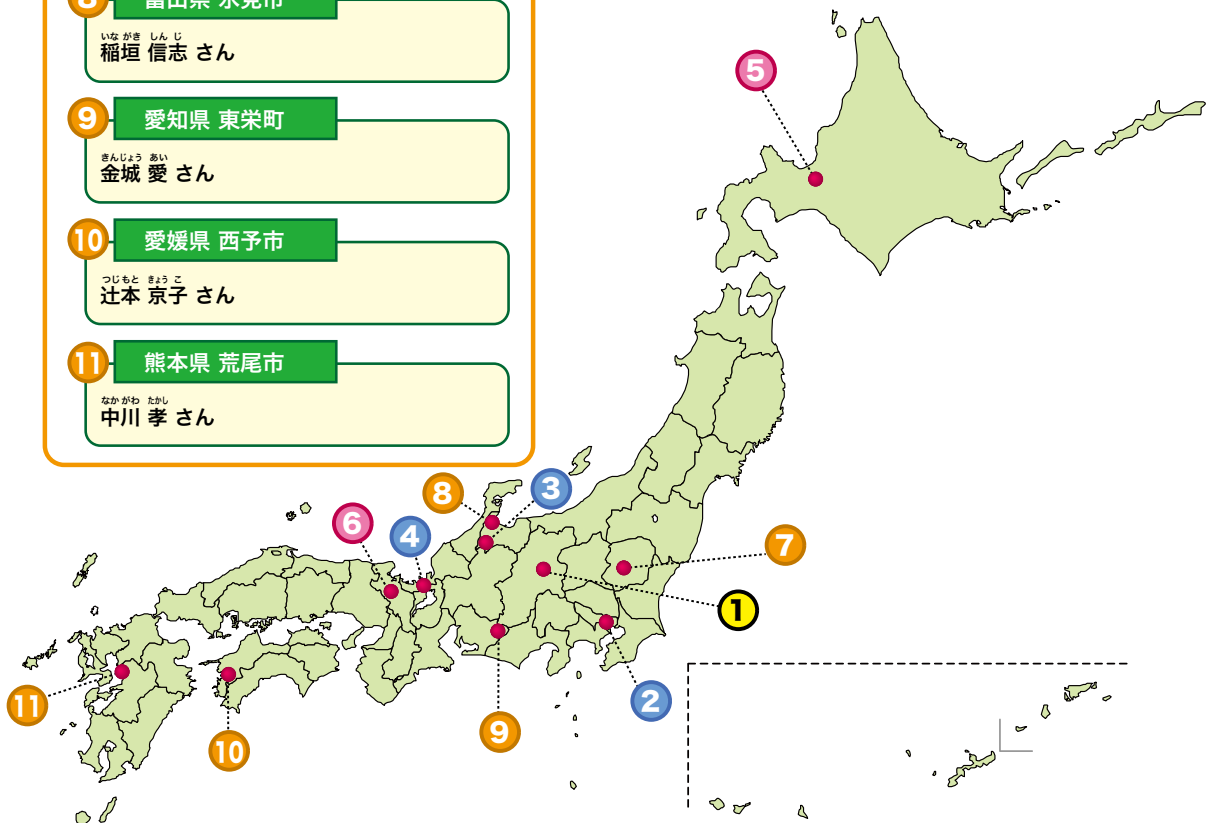
- 2 東京都 新宿区  
特定非営利活動法人 棚田ネットワーク
- 3 富山県 南砺市  
南砺市商工会利賀村支部&  
慶應義塾大学牛島ゼミ利賀プロジェクト
- 4 福井県 小浜市  
小浜市阿納体験民宿組合

## オーライ!ニッポン大賞審査委員長賞

- 5 北海道 札幌市  
WWOOF ジャパン事務局
- 6 京都府 綾部市  
古屋でがんばろう会

## オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

- 7 栃木県 鹿沼市  
吉田 光春 さん
- 8 富山県 氷見市  
稲垣 信志 さん
- 9 愛知県 東栄町  
金城 愛 さん
- 10 愛媛県 西予市  
辻本 京子 さん
- 11 熊本県 荒尾市  
中川 孝 さん





# オーライ! ニッポン大賞グランプリ

株式会社 <sup>しんしゅう</sup>信州せいしゅん村 <sup>むら</sup>(長野県<sup>うへだし</sup>上田市)

内閣総理大臣賞



## ■受賞の内容

信州せいしゅん村は、農村と都市の人々が力を合わせ日本のかけがえのない田舎を守る為に、日本の農村活用のモデル農村『人生復活の里&ヒーリングの里』として位置づけ、その最高峰を求め行動する。観光農業、滞在型農業、農林業体験、農山村体験、農村都市交流、清旬品の販売を通し、人々と交流し、清・旬思想で、土地を耕し、種を蒔き、育成し、収穫し、料理し、皆と食べ、そして、自然や文化に触れるさまざまな活動を企画実施している。

長野県上田市武石地区は、かつてはトマト露地栽培が盛んな地域であったが、ハウス栽培や農産物の輸入拡大により農業経営が厳しくなり、過疎化も進み、地域が疲弊していった。この状況に危機感を覚えた代表の小林一郎氏は、農村の生き残りを考えるために友人に呼び掛け、誰でも自由に意見が言える情報交換・勉強会「のうのうの会」を1998年10月に発足させた。この会は、現在も継続し毎月1回開催している。

皆と語り合うなかで村を活性化させるには、農業だけでなく、「外から来てもらえる事で成り立つサービス提供型の農村を目指す」という方向性が出され、自分で蒔いて・育てて・採って・調理してこだわりを食すオーナー制度「我家我家(かやがや)ファーム」を1999年に開始。2000年には任意団体「信州せいしゅん村」の発足と、耕作放棄された田畑や手入れが出来ない山をボランティア組織を立ち上げ、その力で復畑(そばを栽培)する「せいしゅん村開拓団」、さらに「秘伝たけし流10割そば道場」を始めた。2002年には、信州せいしゅん村の活動の中心となる日帰り農村生活体験「ほっとステイ」事業を始めた。さらに2004年観郷ウォーク、里の迎賓館『耕心館』開設、農村セラピー構築、2005年ふるさと回帰予備校(定住



## ■受賞者の概要

活動年数：20年(前身の活動2年) 活動日数：年間365日  
活動を担う人数：84人(うち専属スタッフ10人)  
参加者数：5,765人 累計82,404人

## ■写真の説明

- ・(写真上)元気高齢者と中学生の共同作業:だんご山づくり
- ・(写真左下)築130年の古民家を改修した【農家レストラン 里の食】
- ・(写真右下)《社貢ワーク体験》集落整備:農道に倒れた不在地主所有の竹を取り除く

■連絡先 〒386-0503 長野県上田市下武石1026-2  
☎0268-85-3939又は090-1605-3238

滞在支援)、2006年信州・桃源郷街道、2008年研修センター『えんでやハウス』開設、2009年は、信州せいしゅん村を株式会社化、【経産省】農商工連携事業認定、2009年UFO(日帰り温泉:湯訪)マップと次々に企画立案し事業化をし、2011年第8回オーライニッポン大賞 フレンドシップ大賞を受賞した。

その後も信州せいしゅん村は、【前例のないことを独創的に】をモットーにして、2014年には、交流の駅、「農家レストラン 里の食」、そば処信濃右衛門、「Gファーム」を設置開園している。

交流の駅とは、地域コミュニティの再生で元気高齢者の集う場所と、そこに都市住民が気軽に加われ、幼子が両親と訪れる場を作っている。長野県中小企業団体中央会が交流の駅事業を長野県下で推進し14拠点が存在している。

Gファーム(じいちゃんのG、ゴールド世代のG)とは、各種野菜の見本園や子どもの探検農園を元気高齢者のたまり場として設置し都市からの親子と交流する場所、高齢者と都市生活者との子どもの交流も展開している。交流の駅【農家レストラン 里の食】は、安全安心のお母さんの野菜食と寒さらしソバ粉(そばの実を二週間清流にさらしてから乾燥させる)の10割ソバを提供している。ほっとステイは県下7地区で展開し、長野県ほっとステイ協会を設立、広域地域振興として取り組まれ、全体の年間受入者数は2万人にも上っている。



2010年度第8回フレンドシップ大賞を受賞後も、ありとあらゆることを試み、その多岐にわたる取り組み内容、実績も群を抜いている。県下7地区でほっとステイが取り組まれるようになり、他地区のモデルに十分なり得ると、その積極性を高く評価された。



# オーライ! ニッポン大賞

## 特定非営利活動法人 <sup>たなだ</sup> 棚田ネットワーク (東京都新宿区)



### ■受賞の内容

棚田ネットワークは、棚田の多面的な価値を再認識し、棚田地域の支援をとおして都市と農山村の人々が相互に理解し協力し合える関係を作りあげることによって、持続可能な循環型社会の創出に寄与することを目的に都市住民が主体となって発足し、2002年8月にNPO法人になった。

主な活動は、【記録する】【伝える】【交わる】【場をつくる】【つなぐ】【手伝える】の6つ。

全国の棚田地域を訪問し、現状の確認や保存会や地域で活動している方々への聞き取り等を通して、棚田を取り巻く環境の把握。調べた情報を整理し公開する【記録する】。会報や各種印刷物の発行、WEBサイトからの情報発信やセミナー・シンポジウムの開催、イベントへの出展など棚田をより魅力的に感じてもらうための普及・啓発活動の【伝える】。棚田保全団体、その他関連団体（NPO・企業・大学【学生】など）との積極的な交流、協働を推進の【交わる】。セミナーや各種イベントなどを企画・実施し、会員非会員を問わず、幅広く棚田への関わり方を提案や、体験プログラムの提供により棚田と人、人と人がつながる場を作る【場をつくる】。地域間のネットワーキング、オーナー制度や体験プログラムなどを実施している棚田地域の一般への紹介、企業のCSR活動のサポート、棚田米の販売支援などの【つなぐ】を行っている。

また、【手伝える】では、耕作放棄地の復田、耕作維持のた



### ■受賞者の概要

活動年数：15年（前身の活動年数7年）

活動日数：通年

活動を担う人数：15人

年間参加者：350人

### ■写真の説明

- ・(写真上)静岡県松崎町石部の棚田
- ・(写真左下)岐阜県恵那市坂折の棚田
- ・(写真右下)棚田ネットワークが編集したガイドブック

■連絡先 〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-18-16  
トーシンハイム704  
☎03-5386-4001

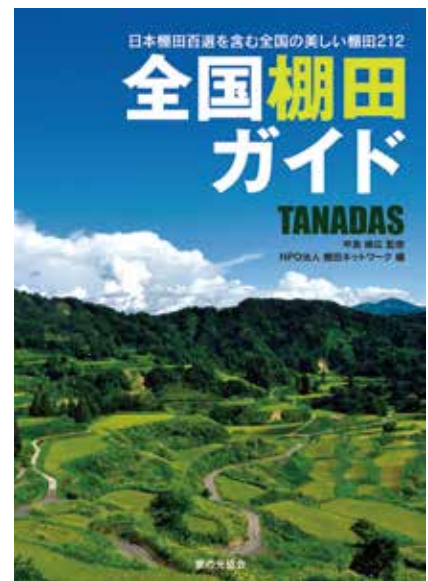
めの農作業支援、生態系保全のためのビオトープづくりなど、岐阜県恵那市「棚田ビオトープ岐阜恵那」と現地での実践活動を行っている。

棚田は、平坦地の水田に比べて「労力は2倍、収量は半分」といわれ労働・土地生産性の低さから、米余りによる生産調整（減反政策）が始まり1970年以来、棚田の転作・放棄がみられるようになった。

当初は、農林水産省のスギの植林政策で主にスギへと転換を促されたが、その後、棚田地域では過疎・高齢化が一段と進み、耕作の担い手ばかりではなく住民そのものがいなくなり、棚田の耕作放棄の深刻化は止まらず集落そのものも小規模・高齢者集落（限界集落）となり消滅の危機が問題となっていた。

棚田ネットワークの活動により、棚田の価値やイメージ、美しい景観など「棚田」認知度向上や農村地域での棚田保全活動と都市からのボランティアの応援の「つなぐ」活動の日本の原風景として、棚田の全国的に保全活動が推進されるようになった。

さらに棚田ネットワークが編集した全国212の棚田の解説と風景写真を網羅したガイドブック「全国棚田ガイド」を発行し、より多くの都市住民に棚田の稲作体験やライトアップ、棚田カフェなどの訪問機会創出に向けて取り組む各地の棚田情報発信している。



耕作しづらい棚田の現状を把握し、棚田の歴史的、文化的価値の発信、棚田農家と都市生活者をつなぐ活動を22年にわたり継続してきたこと。また、全国の棚田関係者との連携の促進、企業のCSR活動への取り組み推進など、原風景の棚田保全活動に果たした役割を高く評価された。



# オーライ! ニッポン大賞

なんとし 南砺市商工会利賀村支部 & 慶應義塾大学牛島ゼミ とが 利賀プロジェクト (富山県南砺市) なんとし



## ■受賞者の概要

活動年数：7年 前進の活動3年 活動日数：年間50日

活動を担う人数：10人（うち専属スタッフ7人）

年間参加者：350人 累計2,100人

## ■写真の説明

- ・(写真上) 村の暮し体験（草刈り）
- ・(写真左下) 山の資源の聞き取り
- ・(写真右下) 村の伝統祭への参加

■連絡先 〒939-2507 富山県南砺市利賀171  
☎0763-68-2527 南砺市商工会利賀村支部

## ■受賞の内容

富山県南砺市利賀村地区は、かつて東礪波郡にあった利賀村で2004年11月1日に周辺町村と合併し、南砺市となった。利賀の名前は、加賀藩の初代藩主・前田利家に由来する。劇団『SCOT』の移入により演劇の村として、また真冬に開催される『そば祭り』、チベットとの交流など過疎地域活性化の先進事例として広く知られた地域であった。

高齢化、過疎化が進む地域の中でなんとか賑わいを創り出したい。そこで商工会は、東京・武蔵野市との20年来の交流経験を活かして、学生を地域内に呼び込み、利賀の伝統文化、食の体験を通して若者目線で地域資源の再発掘、発信をしてもらい、また学生と触れ合うことで高齢者が元気になるように取り組んでいる。

一方、学生は、慶應大商学部の牛島利明教授のゼミ生によるグループである。牛島ゼミでは、産業史や経営史を専攻とし、主に明治期から現代に至る日本の経済や産業の歴史を研究している。現在、日本社会全体で地方創生や地域再生が声高に叫ばれる中、新しい都市や地方の在り方を模索するために、トガプロのメンバーは、利賀村現地でのフィールドワークを行い、村の生活を体験し、産業や経済社会の実情を学び取ろうとしている。

プロジェクト1年目の2012年は、「マイプロジェクト」をテーマに、一人ひとりが自分の取り組みたいことを決めて実行した。

2年目2013年は、都市と農村をつなぐ「架け橋」をコンセプトに、上畠アート展の運営参画、ゼミ生自らが作った有機野菜の販売活動、利賀の情報を都会の人に届けるフリーペーパーの発行などを行った。



大学生と商工会等が連携した地域活性化「利賀プロジェクト」。クラウドファンディングの活用やYouTube、Facebook、Twitter、SNSなど先端技術を活用しての魅力配信が効果を発揮。移住者12組、民泊17軒などの成果。全国の限界集落が「源快集落」たりうる可能性を秘めたモデルケースとして高く評価された。



# オーライ! ニッポン大賞

## 小浜市<sup>あ</sup>阿納<sup>の</sup>体験民宿組合

(福井県<sup>お</sup>小浜市<sup>ぼ</sup>)



### ■受賞者の概要

活動年数：11年 活動日数：年間73日  
活動を担う人数：30人  
年間参加者：4,851人

### ■写真の説明

- ・(写真上) 阿納地区全景
- ・(写真左下) スタッフの指導による魚さばき体験
- ・(写真右下) シーカヤックの海の体験

■連絡先 〒917-0105 福井県小浜市阿納10-15  
☎0770-54-3313

### ■受賞の内容

阿納地区の漁業者は、大半がトラフグの養殖とともに民宿を経営してきたが、景気低迷等を受けてフグの需要が伸び悩み、経営の不振、後継者の確保、ひいては集落の人口減少が課題となっていた。そこで、地域の強みである「漁業・養殖」と「宿泊」を活かし、漁村の魅力を観光資源として売り出すために、地域の漁家民宿13戸が連携し、2006年に「小浜市阿納体験民宿組合」を設立した。翌年には「釣り堀」、「魚さばき施設」、「バーベキュー場」で構成される漁業体験施設「ブルーパーク阿納」を整備し（2009年にリニューアル）、教育旅行の誘致を本格的に開始した。

提供する体験プログラムは、県内外の小中学生を対象に、釣り堀でマダイを釣り、釣った魚をさばいて食べる一連のコースをメインとした体験学習を実施している。また、沖合の養殖イカダや餌やりの見学等を行う漁船クルーズ、同地区の主要農産物である梅を活用した梅もぎ体験・梅ジュース作り、同地区のお寺での座禅体験など、地域の関係者が一体となって体験メニューを開発・提供している。

組合員（漁家）は、毎年20～30校の県外の中学校や旅行代理店等を訪問し、受け入れ体制や体験メニューを説明する等、積極的にPR活動も展開している。新たなメニュー開発にも力を入れており、2014年度からは新たにシーカヤックを導入している（2016年度に50艇を追加し、現在は100艇体制）。漁業や加工等体験では、命をいただくことの大切さを伝えたり、人と人との交流を深めたりするように工夫し、小中学生が各民宿に宿泊する際には、夜に一日の体験を振り返って感じたこと等を民宿の主人や女将と語らう場を設けている。

2016年度から訪日外国人の受け入れ体制を

整えるため、組合員の語学能力向上のための会話研修や、モニターツアーを実施している。また、近隣の地区で「たこカゴ漁」や地域の伝統食品である「サバのへしこ（糠漬け）づくり」体験を実施していることから、広域的な連携や地域一帯を様々なメニューが揃った観光体験のホットスポットとしていきたい。

体験学習の利用者数は、2007年の183人が2016年には4,851人と大幅に増加しており、この体験学習が牽引する形で、当地区の漁家民宿への宿泊者数は順調に増加している。漁家経営が改善した結果、現在、組合員13戸のうち11戸は後継者が確保されている。

また、各学校を受入れる際は、必ず「入村式」と「退村式」を行い、若手の組合員が挨拶をし、受け入れる側からのメッセージを伝えている。当地区では後継者が確保されている一方、そうした若手は社会に出た経験が少ないことから、このような機会は人前で話す格好のトレーニングとなっている。つまりこうした活動は、子供たちに漁村の魅力を伝えるだけでなく、受入れ側の感受性や会話・表現力を高める等、組合員自身が成長する場にもなっている。

なお、当施設を体験で訪れた県外の中学生在が小浜市のファンになり、県立若狭高等学校海洋科学科（旧：小浜水産高等学校）にこれまで5人が入学した。中には市内に定住したいと希望する者もあり、当施設での体験学習はIターンや定住化の促進にもつながっている。



漁村集落が一丸となって、漁業・トラフグ養殖・民泊・観光体験漁業と複数の収入源確保を進めている。漁業者13戸中11戸に後継者あり。新たな体験メニューのためシーカヤック100艇導入と臨機応変な取り組みを実施しつつ入村式・退村式での若手の挨拶など若手組合員の育成システム構築をしっかりと確立していると高く評価された。



# オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

## ウーフ WWOOF ジャパン事務局

(北海道札幌市)



### ■受賞者の概要

活動年数：23年 活動日数：年間365日  
活動を担う人数：4人（専属スタッフ4人）  
参加者数：年間3,800人、累計41,200人

### ■写真の説明

- ・(写真上) 和歌山県ホストで田植え中の英国とスイスのウーファー達
- ・(写真左下) 里芋出荷準備中のフランス人ウーファーと岡山県ホスト
- ・(写真右下) 北海道ホスト宅で皆の昼食準備中のイタリア人ウーファー

■連絡先 〒065-0042 札幌市東区本町2条3丁目6-7  
FAX:03-4496-6370

### ■受賞の内容

WWOOF（ウーフ）とは、World Wide Opportunities on Organic Farms「世界に広がる有機農場での機会」の頭文字。具体的には、WWOOFは、有機農場を核とするホストと、そこで手伝いたい・学びたいと思っている人とを繋いでいる。有機農業とは、無農薬、無化学肥料で作物を栽培する農業で、人間と動物、環境にも考慮した農法。

農業を使う方法よりかなり手間がかかり、また大型機械を使わない場合も多く、人手が必要である。

WWOOF は、1971年イギリスで芽生え、オーストラリア、ニュージーランドで発展し現在は、世界60か国以上で事務局が設置されている。日本では、1994年に誕生。2002年からはインターネットを使いWWOOFジャパンとして本格的に活動している。

受入する農家を「ホスト」と呼び WWOOF登録し、食事と宿泊場所を提供する。有機農家のほかに、持続可能な生き方に取り組む自然体験学校、農家民宿、農家レストランなど、WWOOFジャパンに、全国440軒の農家と事業所が登録している。

ホストに泊まり農業を手伝う人を「ウーファー」と呼ぶ。ホスト農家と交流しながら、自分に合う「何か」を得よう、という意気込みを持っている人たちが参加している。受入の「ホスト」、手伝う「ウーファー」とともに、WWOOFジャパンに登録し、ウェブサイト内でプロフィールを見てメッ



セージを送り、希望の相手を見つけていく。

WWOOF ジャパン共同代表の星野紀代子さんは、経済発展のみに重きが置かれているような浮き沈みの激しい現代において、そんな中でも一人一人が幸せを感じながら過ごすことができる社会が形成されることを望み、日本でWWOOF（ウーフ）を広げることで、①日本の農業、特に有機農業を元気に。②人を大切にしたい社会づくり。③食に関心を。④環境に配慮した生活様式の推奨。⑤都会と田舎の橋渡し。⑥日本と外国とのつながりの深化。⑦日本を再発見することを使命・役割としている。

ウーファーたちはホスト家族の一員として地域行事にも貢献している。中学校の英語授業に参加して、紙風船やコマで生徒と交流したり、小学校の運動会に参加して場を盛り上げたり、お祭りの神輿を担いだり。滞在期間は短いですが、地元に着いて活躍していると言いつつ、あるときオランダからのウーファーがホストである90歳近くのおばあさんと農作業中に、おばあさんが熱中症で倒れ、ウーファーは、おばあさんを背負って畑から自宅まで急いで連れて行き介抱したが、亡くなってしまった。ホスト家族が狼狽し、悲しみにくれているなか、家族の気持ちを深くくんでいたり家事を自ら率先してやり遂げたこともあった。どこの国から来ようが、農家の家族と一緒に生活するのでウーファーとホストは、まるで家族のような関係をこの短い間に構築していくと言う。あえて、手が掛かる有機農業を選択している農家と多様な農業を学びたい人をつなぐ仕組みとして、オーガニック志向、日本文化の紹介、地方文化の保護の役割も期待される。



地球環境にやさしく、安全安心な食べ物に関心のある人々と全国440軒の農家を結び、ホスト農家の手伝いをするのと交換に食事と宿、農業の知恵などを授かるという仕組みをコツコツと積み上げ成果を挙げてきた。これからのグリーン・ツーリズムの一つの形を示していると高く評価された。



# オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

## こや 古屋でがんばろう会

(京都府綾部市<sup>あやべし</sup>)



### ■受賞の内容

綾部市にある集落「古屋（こや）」は、3戸4名が暮らす限界集落である。10年前は廃村寸前。誰もが「もう遅い」「もう無理だ」と、あきらめていた。

2006年制定の「綾部市水源の里条例」がきっかけに、住民の間で「自分たちの代で集落を終わらせたくない」という想いが高まり、近くの森で採れる栃の実を使って、お菓子等の開発・製造をはじめた。

2010年綾部市主導の「ふるさとボランティア」によってボランティアが訪れるようになり、2011年、継続しようと「古屋でがんばろう会（以下、がんばろう会）」を設立した。

2018年1月現在、正会員（年会費1,000円）は53名（役員11名）。賛助会員（年会費不要）のボランティアが300名程登録されている。発足当時の会員28名が増えるにつれて、活動の幅も広がり、近郊の綾部や舞鶴、福知山のお母さんグループリーダーが会員となり、その会員の呼びかけで、毎月1、2回、数名のお母さんが、栃餅や栃の実おかし等の加工を手伝いに来てくれる。

お母さんたちのSNS発信力は高く、今では古屋から1時間圏内に住む主婦層にも情報が届いている。

栃の実のお菓子作りは、時間と手間がかかり実は1つ1つ、100年以上使っている道具で皮を剥いていく。あく抜きも難しく、国土緑化推進機構の「森の名人」を受賞した渡邊ふじ子さん（91歳）や京都府の「農の匠」を受賞した細見恵美子さん（85歳）、そして岩崎キクノさん（94歳）の丁寧な教えで、消えつつある「技」の継承につながろうとしている。

おばあちゃんががんばる姿は、若い女性の心を打ち、皆、「元気をもらえる」と言って喜んでお手伝いに来てくれる。

「おばあちゃんに昔ながらのやり方を教えてもらいながら、丁寧に作るということを学んでいる。とても贅沢な時間を過ごしている」と言う参加者もいる。



### ■受賞者の概要

活動年数：7年 活動日数：31日

活動を担う人数：8人 参加者数：年間700人 累計3,700人

### ■写真の説明

- ・(写真上) がんばろう会のメンバーらとの栃の実拾いの様子
- ・(写真左下) おばあちゃんの指導で料理作りを楽しむボランティア参加者
- ・(写真右下) 人々を元気にする樹齢1,000年の栃の木

■連絡先 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8-1

☎0773-42-3280 綾部市役所定住・地域政策課内

一番の成果は、これらの活動がおばあちゃんたちの生きがいになっていることである。昭和30年代ごろは、14軒70人が住んでいたのが10年前にたったの6人となり、「もっと若ければ」「もっと人がいたら」と、村おこしの取組をあきらめ、家に閉じこもっていた。

廃村にしたいくないという想いではじめた取組がボランティアを呼び寄せ、がんばろう会となり、「ヒト」（ボランティア）、「モノ」（栃の実や情報）、そして少しずつ商品の売上やボランティア協力金等により「カネ」が回りだした。おばあちゃんたちの頑張りには近隣の集落の住民にも影響を与えている。

新商品の栃の実クッキーを開発するなど、さらなる向上心、研究意欲は衰えるところを知らず、平均年齢90歳でもこれだけ挑戦できるのだと、おばあちゃんたちが挑戦している姿をみて、「元気を出して仕事をしようと思った」「大きな工場の安いものばかりではなく、手作りの製品に目を向けたいと思った」「年齢を理由にはいけないと思った」等、人生や価値観が変わったという人もいる。

森に入るイベントでは、樹齢1,000年の栃の木に思いを馳せる、自然の中でリフレッシュする、栃という普段馴染みのない木について知る機会になったと、さまざまな人を元気にしている。

多くの方に日本の限界集落やそこでがんばる人たちについて知っていただき、地方に目を向ける足掛かりになればと思っています。

住民たった4人の限界集落を守ろうとボランティアが作った自主応援団。地元の栃の実を使ったお菓子などの製造。消えつつある「技」の継承は、中山間地域の限界集落で地域での伝統的な生活を守り、継続していくための高齢者のガンバリ、それを支える人々の活動は“元気”が出ると高く評価された。



# オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

ブルーベリー農園園主・「里のカフェ はな」<sup>よしだ みつ はる</sup>吉田 光春 さん (64才) (栃木県鹿沼市)<sup>かぬまし</sup>



## ■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】(5年)  
【地域での実践活動】(4年)

## ■写真の説明

- ・(写真上) 吉田光春さん、信子さん
- ・(写真左下) こんにゃくフェア
- ・(写真右下) フルーツ一杯の予約限定のアフタヌーンティー

■連絡先 〒322-0252 栃木県鹿沼市加園409-13  
☎090-5805-9993

## ■受賞の内容

吉田さんは、宮城県仙台市に生まれ。東京の自動車部品を製造する会社に勤め、22才の時に信子さんと結婚。子育てが終わり会社の開催した人生設計セミナーに参加し定年後の暮らしを考えるようになり、30代の頃にやっていた家庭菜園の野菜作りの楽しさを思い出した。

身体を動かす農業を定年退職後に行おうと二人で決め、2008年定年を前に栃木県の農業大学校に当時住んでいた東京都町田市から半年通い、農業の基礎を学んだ。そして、栃木県鹿沼市が分譲した菜園付き住宅を購入し、2013年退職を待って鹿沼市に移住した。

自宅菜園の他に、2013年6月から近所の農家から畑を借りて、ブルーベリーや野菜栽培を始めた。

さらに、2014年4月には、収穫したブルーベリーの選果等をするために、畑の横に建つ空き店舗を借りた。

妻は、学校給食の仕事をはじめ、パン屋、デイサービス等の調理分野の仕事を経験していたので、カフェを開きたいという夢を持っていた。

そこで、二人で相談し地域の美味しい野菜や果物を発信できるカフェを2014年7月にオープンした。

2015年10月、加工所の免許を取得しジャムの製造を開始。

2016年10月、菓子製造の免許を取得マフィン等の製造を開始。

2017年3月には、仕出しの免許も取得し弁当も作れるように、安全な野菜やブルーベリーなどを上手に活用できる6次産業化の基盤を一つ一つ整備している。農業は月～木曜日に黒豆を中心に、カフェで使うレタス、大根、ニンジン、さつまいも等を栽培。

「里のカフェ はな」は、週末の金、土、日の三日間の営業。夫婦で心を込めて作った自家製ブルーベリーのクレープや自家製野菜を使ったパスタ料理を中心に提供して人気も高い。

予約限定のアフタヌーンティーは、お皿3段のデザートなどボリューム満点で話題となっている。

ブルーベリー朝食のメニューは、ブルーベリースムージー、ブルーベリーベーグル、トマトパン、ブルーベリージャム、新鮮野菜サラダ、ブルーベリーゼリー、ヨーグルトムースのせ、夏野菜たっぷりのミネストローネ、ファーマーズエッグ自家製トマトソースのせ、飲み物(コーヒーorブルーベリージュース)。家族に食べさせたいと思えるような、「もっとも安全で美味しいものをつくりたい」という吉田さんの想いから週末限定の提供している。



定年前から農業大学校に通学するなど準備万端。農園とカフェを経営する夢を実現するために、食品加工免許、菓子製造業免許を次々と資格取得する堅実な長期経営を志向。夫婦二人三脚、経験と趣味をいかしたセカンドキャリアは高く評価された。



# オーライ! ニッポン ライフスタイル賞

持続可能な集落維持にむけた農村観光仕掛け人 **稲垣 信志 さん** (48才) (富山県氷見市)



## ■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村への移住】(富山県氷見市に移住2年10か月、それ以前は富山県富山市大長谷地区)

【地域での実践活動】(12年)(大長谷地区：2007年～2014年、氷見市：2015年～現在)

## ■写真の説明

- ・(写真上) 米づくりをしている稲垣さん
- ・(写真左下) 脇之谷内地区で獅子舞体感ツアーの様子
- ・(写真右下) 屋根雪おろし(雪すかし)の方法を実践

■連絡先 〒925-0114 富山県氷見市仏生寺5234  
☎090-1851-8441

## ■受賞の内容

2015年4月に氷見市地域おこし協力隊に着任し、同年5月に氷見市仏生寺地区脇之谷内集落にある空き家に妻と2人で移住した。移住当初は、賃貸契約であったが、2017年4月に入居している家を購入し、更に地域の人々からの信頼を築くことができた。

地域おこし協力隊としては、地域貢献活動と並行して、退任後の起業準備を行っている。

農業を中心にした年収250万円で移住者が暮らせる環境づくりを目指しており、2016年から営農組合脇之谷内に所属し、5反の水稲、2反の畑を管理している。また、地域と都市農村交流事業を展開している。

稲垣さんは、愛知県生まれ。2004年に富山県の新湊大橋の施工管理技士として携わるために富山県に赴任し、2005年に富山市の限界集落大長谷地区で開催された山菜教室に参加し、その後、里山の人の良さ、自然、炭焼きやかんじきづくりなど昔から伝わる民芸品の技、山菜やキノコの郷土料理にひかれ毎週末に通うようになった。

2007年から大長谷地区で畑を借り、2地域交流を始める。通い始めた当初は大長谷地区に訪れる人もわずかであったが、都市住民のリピーターがもっと訪れやすくするために2009年にNPO 法人大長谷村づくり協議会が「ながたん農援隊」を立ち上げ、その事務責任者になり、耕作放棄地を

使って住民から山菜や野菜作りを学んだり、里山全般で日常行われている生活のお手伝いを行う「ながたん農援隊」の活動を展開、当初年間100人にも満たなかった都市農村交流の参加者が2014年には3,000人を超えるようになった。

ながたん農援隊の都市農村交流活動は2014年の内閣府・農林水産省の「ディスカバー

農山漁村の宝」に認定された。

実際に地域で暮らさなければ過疎はますます進む現実に自問自答することが増えてきた。「中山間地域で豊かに暮らせるライフスタイル」を目指し、自らが中山間地域に住むモデルケースになると決意して、2014年3月に会社を退職。何をすべきか全国各地の先進地事例を視察・研修。里山再生の活動の場を富山県氷見市に移し、2015年から地域おこし協力隊として、中山間地域で農業を中心とした活動をしている。

移住後半年間は、地域の信頼を得るため、朝から晩まで、土にまみれていた。人脈と信頼関係が構築できて、取り組んだのが、閉鎖的な意識を改めて里山暮らしで外からのお金を稼ぐことと、移住定住のきっかけづくりとして都市農村交流イベントを月2回ペースで行うことだった。半年間で延べ200人近い都市住民が参加し、現在もイベントを企画中である。

都会から移住した自分だからこそ里山の人と都市住民のそれぞれの目線が分かる。都市住民は田舎にあこがれ移住・定住を希望するが実現には、安定した収入を確保できるか、家を借りられるか、地域に溶け込められるか、などの不安がある。その不安を解消するため、自分自身が里山暮らしで体験したこと、農作業のことなどを実際の活動を通して伝えていきたい。



農山村の美しい自然、人の好き、生活文化の魅力を発信するとともに、リピーター増加のためのイベントの企画・実践し、さらに農業を中心とした田舎暮らしを希望する移住者モデルとして取り組むその旺盛な活動力は高く評価された。



# オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

体験型ゲストハウス「<sup>だのん</sup>danon」オーナー <sup>きん じょう</sup>金城 <sup>あい</sup>愛さん (33才) (愛知県東栄町<sup>とう えいちょう</sup>)



## ■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】(5年) 出身は沖縄県、三重県から移住

【地域での実践活動】(5年)

地域おこし協力隊や国の事業を活用し地域の暮らしを体験できる宿泊施設を立ち上げる。ただ泊まるだけではなく地域の暮らしや人に出逢えるようなプログラムやイベントを実施。

## ■写真の説明

- ・(写真上) 金城 愛さん
- ・(写真左下) 150年の古民家を改装した「体験型ゲストハウスだのん」
- ・(写真右下) 東栄町の風景

■連絡先 〒449-0214 愛知県北設楽郡東栄町大字本郷字下前畑6-1  
☎0536-76-1860

## ■受賞の内容

22歳の時に夢を追いかけ沖縄県より三重県に移住し、製造業や結婚式場のサービススタッフとしてキャプテン業務も務めた。27歳の時に夢だった海外旅行を幼馴染と4か月かけてヨーロッパを周遊した。

帰国後新たな夢を探して、愛知県事業「あいちの山里で暮らそう80日間チャレンジ」に参加した。山里・田舎の暮らしに初めて触れて、東栄町の地域の暮らしに興味を持ったことから2013年から地域おこし協力隊として東栄町で暮らし始めた。2年間の協力隊としての活動を経て、地域の人とのかかわり、自分に合った生き方を考え、2015年4月から国の事業を活用し、築150年の古民家で「奥三河で暮らすように遊ぶ」をコンセプトに「体験型ゲストハウスだのん」をオープンさせた。

宿泊者には東栄町の「人」と「暮らし」に焦点を当てた体験メニューを提供。農業体験や鮎釣り体験など東栄町の住民から知恵や技を教わることでこの土地で培われてきた風土や行事、人とのつながりを体感してもらったり、旬のものを食事に取り入れることで季節の変化を感じてもらっている。「だのん」は、この地域の方言である「そうだのん」からとったもので「そうだね」の意味。

沖縄出身であることを活かし、2か月に1度、地元住民もゲストもみんな“ごちゃませ”で楽しくご飯を食べましょう”

というイベント「チャンプルーナイト」を実施している。

ゲストは地元住民との交流により、より深い東栄町の魅力に触れる機会となっている。

5年前に縁あって訪れた東栄町。初めての田舎暮らしで、慣れないことだらけの自分に居場所を作ってくれた地域の皆さん。皆さんの暮らしから、「生きていくことはシンプルでいい」ということに気づかされた。

田舎暮らしは手作りが基本。テーブルやイス、こんにゃくや味噌などすべて当たり前のように自分で作る。この価値をより多くの人に伝えたい、地域の人とかかわりながら感謝の気持ちを伝えたい。そのために自分ができることは何かを考えた結果が今の暮らしにつながっている。

一人で経営しているが、2017年12月よりヘルパーとして住み込みで宿の手伝いをしてくれる友人がいたり、地域の皆さんが遊びに来たり野菜を持ってきてくれたりと、まさに「一人だけど独りじゃない」暮らし。料理が好きなので、地元の野菜や東栄町の特産品である東栄チキンや名古屋コーチン、鮎などを使ってゲストさんと一緒に調理をし、みんなで食べる時間は、かけがえのないものとなっている。

今後は、奥三河地域で頑張っている人や何かにチャレンジする若者と連携してみんなでこの地域を盛り上げていきたい。また、田舎体験の提供を通して、移住を視野に入れた関係人口の増加につなげていきたいと考えている。



これまで埋もれていた地域、人、山村の生活文化を体験として提供して、移住希望者と地域の人との交流の場になるなど地域おこし協力隊卒業生が立ち上げた体験型ゲストハウスは、山村に新しい風を吹かせていると高く評価された。



# オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

企業組合遊子川ザ・リコピンズ代表理事 <sup>つじもと</sup>辻本 <sup>きょうこ</sup>京子さん (64才) (愛媛県西予市<sup>せいよし</sup>)



## ■受賞者と農山漁村との関わり

【移住後】(16年) 奈良県で縫製工場を経営していたが、トマト栽培をしていた知人に誘われ、2002年に遊子川に移住を決意。

【地域での実践活動】(15年)

## ■写真の説明

- ・(写真上) トマト栽培をする辻本さん
- ・(写真左下) 仲間とともにトマトの加工品づくり
- ・(写真右下) 東京都「ちよだいちば」にて店頭販売

■連絡先 〒797-1711 愛媛県西予市城川町野井川829  
☎0894-85-0266

## ■受賞の内容

奈良県で主人と縫製工場を営んでいたが経営状態悪化により廃業し、次へのスタートを考えているときに、愛媛県西予市遊子川でトマト栽培を始めていた知人の誘いで、2002年に初めて遊子川を訪問した。

夫婦ともに農業未経験であったが、「トマトが大好き」という思いから、主人を説得し遊子川に移住してトマトの栽培に取り組むことを決意し移住。

遊子川地区は、50年ほど前から大玉トマトの栽培が盛んであったので沢山の先輩から親切にトマト栽培の基礎を教えていただいた。トマト栽培を始めて、慣れない農作業と大嫌いな虫に驚かされながらも、花が咲き、実がなり、色づき始めるとワクワクして最初の収穫の時には、あまりの愛おしさに涙がでるほど嬉しかった。

3年後には、休耕地を買い取り、初めて自分たちの農地を持つことができたが、苗を定植したばかりのハウスが暴風で倒壊。主人と二人で途方に暮れて「もう無理!奈良に帰ろうか」と諦めかけていたところに、周りの農家さんたちが、駆けつけていただき皆さんで壊れたハウスを立て直し、苗を植え替える作業を手伝っていただき、危機を乗り越えることができた。その時に、この土地で頑張っていこう!いつか、遊子川の人たちに自分たちなりの恩返しをしよう!と思い、主人も私もトマト栽培に力を入れるようになった。

高齢化や後継者不足から農家も生産量も減少し、トマト農家が衰退という危機感と規格外トマトの出荷ができないことから廃棄していた規格外トマトを活用したいという思いが強くなり、仲間づくりをはじめ、たくさんの方との出会い交流を深めながら、トマト加工に繋がる事業を模索していった。

2010年、全住民参加による地域活性化のための組織が結成され、その活動計画の一つ

『特産品開発事業』で公民館の婦人学級料理教室で、規格外トマトを使った加工品開発の研究を開始。2年後には、トマト農家を中心とした女性20名による『遊子川特産品開発班』活動が始まり、私はその代表を努めた。

2013年度に旧JAの空き施設を改修し加工所とレストランとして整備された施設を拠点として2014年4月から農家レストラン「食堂ゆすかわ」をオープン。同時に商品開発を進めていた自家製「トマト酢」を使った『トマトユズポン酢』の販売をスタートした。

メンバーと一緒にトマトの加工作業、レストランでの調理にも携わりながら、主人とトマト栽培に取り組む多忙な日々を送るようになった。遊子川トマトや加工品の販路拡大のために都市部で開催される商談会や物産展などのイベント販売への参加や「遊子川トマトオーナー制度」の管理契約農家を請け、主人と二人でオーナー様のトマト40口分(1口5本)を管理している。地元小学校から総合学習の授業でトマトの圃場に訪れる小学生や各機関が取り組んでいる農業体験ツアーなども受け入れている。

遊子川地域は、移住時に比べると人口も激減し、今では人口300人、高齢化率57%の限界集落。豊かな自然があり美味しい食べ物があり、そして素敵な仲間恵まれて心から満足している。今後も遊子川の未来のためにも、高品質なトマトづくり、加工品の開発に取り組み、多くの皆さまに味わっていただきたいと思い、IターンやUターンなどの農業の担い手の確保や地域の安定した雇用の創出、トマトのブランド化にもつなげていきたい。



地域おこしに貢献し、地域活性化のリーダーとなって活躍している姿は、まさに、女性の社会参加、働く女性の模範的なライフスタイルとして高く評価された。



# オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

(株)オリーブファクトリー代表 <sup>なか がわ</sup> 中川 <sup>たかし</sup> 孝さん (65才) (熊本県 <sup>あらおし</sup> 荒尾市)



## ■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】(4年) 地元荒尾市出身、ふるさとに夫婦で帰郷し耕作放棄地にオリーブ栽培を推進。

【地域での実践活動】(半年)

## ■写真の説明

- ・(写真上) 中川さんご夫婦
- ・(写真左下) 栽培しているオリーブの手入れ
- ・(写真右下) 栽培したオリーブを活用したカフェレストランを開業

■連絡先 Ristorante 中川オリーブ農園 Omegane(まるめがね)  
〒864-0026 熊本県荒尾市牛水2029  
☎0968-57-7606

## ■受賞の内容

中川さんは、荒尾市の農家出身。家電メーカーに勤務していた40代のとき海外出張で見たワイナリーとなだらかに続くぶどう畑を見て「いつかこんな風景を故郷に自分の手でつくりたい」と夢を抱いていた。

58歳の時、実家に戻り、故郷の荒廃した風景を見て何とかしたいという思いに駆られ、40代で見たあのワイナリーの景色が甦り思い浮かびオリーブ畑を作ろうと耕作放棄地を購入。オリーブの木を植え始め少しずつ植えて今では1,000本。2016年から実の収穫も始まりオイルが搾れ、2017年7月に農家レストラン「Omegane(まるめがね)」をオープンさせた。

妻はレストランを手伝い、畑では野菜を育てている。オリーブ畑が一面に広がる最高のロケーションで、レストランを営みながらオリーブの商品開発の夢をもって夫婦で暮らし、地域の人々と交流している。

荒尾市では年々進む農地担い手の高齢化、それに伴う農家の減少や耕作放棄地の増加が深刻化していた。

その解決策として、2010年(平成22年)度より栽培の手間がかからず、荒尾市に点在する耕作放棄地において作付可能なオリーブの栽培を推進しており、2014年度には約2tを収穫し、オリーブオイル等の加工品を販売できるまでになった。しかし、2014年当時は搾油するためには福岡市までオリーブの実

を運ぶ必要がある等前例のないオリーブ栽培がビジネスとして成立するのか懐疑的な農家が多く、オリーブの栽培本数が伸び



悩むという問題もあった。その現状に対して、中川氏は民間企業に勤務している頃からもどかしさを感じており、定年退職を機に耕作放棄地となっていた自作地周辺の農地を購入し、全体で3.2haの農地に当初約550本のオリーブ苗木

を植え、オリーブ農園として整備した。

さらに、搾油等の問題を解決し、荒尾市のオリーブの産地化への機運を高めるために、新たな法人として(株)オリーブファクトリーを設立し、農園内にオリーブの搾油場を建設。荒尾市でオリーブの生産から加工・販売まで一貫して行うとともに、受託加工、観光農園等の事業を取り組むこととした。



農家レストラン「Omegane(まるめがね)」は、地元産の野菜とオリーブの漬物やオリーブオイルをふんだんに使用した料理を提供している。近隣はもとより福岡市や関東、関西から集客を行い盛況である。荒尾市には世界遺産の万田坑やラムサール条約登録湿地に登録された荒尾干潟、九州内では最大規模の遊園地であるグリーンランドリゾートといった観光資源が豊富に存在し、荒尾市に訪れる観光客は年間200万人を超えている。観光客を観光農園に呼び寄せ、オリーブの効能や認識を深めてもらうとともに荒尾市内での滞在時間を伸ばして、より観光客に対して荒尾市への関心を増進させるには、中川農園のオリーブと農園を一望できるレストランは欠かせない資源になりつつある。営業は昼の時間帯のみにもかかわらず、多数の集客を見せており、名物の木箱に山盛りされた「モンスターサラダ」やアヒージョ、ピザ等を提供している。レストランでは、オリーブオイルソムリエの中川氏がこだわって選んだオリーブオイルの他に、自家製の米やブルーベリー、南阿蘇のレモンガラス茶等季節の品物、こだわりの品物も販売されている。レストランにはテラス席も配置しており、遠くに雲仙・多良岳を望み約千本のオリーブが並ぶ丘の組み合わせはまるで一枚の絵画のようである。

故郷の耕作放棄地にオリーブの木で風景づくりを始め、さらに風景とともにあるレストランと夢は尽きない。地域の活性化に貢献していると同時に、第二の人生を前向きに切り開いたライフスタイルには、模範とすべき点が多々含まれていると高く評価された。



# 第15回オーライ！ニッポン大賞の概要

## ●趣 旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行いながら、交流の拡大や地域活性化に寄与した団体・個人、及び都市と農山漁村双方の生活や文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くPRすることで農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

## ●表彰対象・審査基準

### オーライ！ニッポン大賞

「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等を通じて、都市と農山漁村の共生・対流の拡大に寄与した実績や効果の高い団体又は個人。

#### (1) 募集の対象

- ・学生・若者カツヤク部門 主に30代までの若者の活躍により推進されている活動
- ・都市のチカラ部門 主に都市側からの働きかけによって推進されている活動
- ・農山漁村イキイキ部門 主に農山漁村側からの働きかけによって推進されている活動

#### (2) 表彰の種類

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件

※オーライ！ニッポン大賞と、連携表彰事業から推薦される「オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞」の中から1件が選ばれます。

オーライ！ニッポン大賞 3件程度

審査委員長賞 5件程度

#### (3) 審査の基準

新規性	農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること。
独自性	地域固有の資源や個性を活かした、オリジナリティ豊かな取り組みであること。
持続性	法人化や収益向上等により持続性の高い取り組みであること。
モデル性	他地域への応用や波及が期待できるモデル性の高い取り組みであること。
効果性	農山漁村地域を活性化する効果があり、今後も効果が持続して発現すると見込まれること。
社会性	地域の内外の多様な主体が参加連携し、地域の課題解決に取り組んでいること。

### オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

UJターンにより都市から移住した人、もしくは都市と農山漁村を行き来する二地域居住者等のうち、農山漁村において魅力的かつ新たなライフスタイルを実践し、都市と農山漁村の共生・対流に貢献している個人。

#### (1) 表彰の種類

ライフスタイル賞 3件程度

#### (2) 審査の基準

新規性	農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルを実践していること。
独自性	個性的で魅力のある活動であること。
継続性	新たなライフスタイルの実践に継続性があること。
モデル性	新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること

# 第15回オーライ！ニッポン大賞審査委員会の構成

会長	安田 喜憲	ふじのくに地球環境史ミュージアム館長（オーライ！ニッポン会議副代表）
	井上 和衛	明治大学名誉教授
	岡島 成行	学校法人青森山田学園理事長、公益社団法人日本環境教育フォーラム副会長
	志村 格	一般社団法人日本旅行業協会理事長
	長岡 杏子	TBSテレビアナウンサー
	平野 啓子	語り部、かたりすと、大阪芸術大学放送学科教授（オーライ！ニッポン会議副代表）
	元石 一雄	NPO法人水と緑の環境フォーラム常務理事





主催：オーライ！ニッポン会議(都市と農山漁村の共生・対流推進会議)

協賛：一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構

後援：総務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、  
環境省、一般社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

## オーライ！ニッポン大賞 事務局

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地 神田金子ビル5階

TEL 03-4335-1985 FAX 03-5256-5211 ホームページ <https://www.kouryu.or.jp/service/ohrai.html>

「オーライ！ニッポン会議」の事務局を構成する 21 団体

(一財) 地域活性化センター	(公社) 全日本郷土芸能協会	(一財) 日本青年館	(公財) 日本修学旅行協会
(公財) 全国修学旅行研究協会	(公財) 育てる会	(公財) パブリックヘルスリサーチセンター	(公社) 日本青年会議所
日本商工会議所	全国商工会連合会	(一財) 伝統的工芸品産業振興協会	(公社) 日本観光振興協会
(一財) 地域開発研究所	(公財) 日本離島センター	(公財) 都市計画協会	(公社) 日本環境教育フォーラム
(一財) 農村開発企画委員会	全国水土里ネット(全国土地改良事業団体連合会)	全国森林組合連合会	(一財) 漁港漁場漁村総合研究所
(一財) 都市農山漁村交流活性化機構			